

# 日本有数の歴史学者の多彩な論文集

専門である西洋中世史・文化史を核にしつつも、自在にほかのトポスへと越境して、予期せぬ視角を切り開いていく

榊山紘一 著  
▶ 歴史の歴史

12・17刊 四六判474頁 本体3000円  
千倉書房

## 中条省平

日本有数の歴史学者が1983年から2011年にかけて記した論文を集めた書物です。著者の専門は西洋中世史と西洋文化史ですが、その領域の研究を核にしつつも、自在にほかのトポスへと越境して、予期せぬ視角を切り開いていくのが、榊山氏の学問的ネットワークの特質です。本書は、テーマを限定せず、さまざまな題材を扱う論文集(全17講)であるがゆえに、氏の真骨頂ともいふべき論述の領域の多彩さが、切り口鋭い多面体のように輝きまをみることができると好評です。

学、西欧中世の口承文芸、百科全書と博物図譜といったかなり専門的なトピックも登場します。どれも興味津々の展開を示しますが、まずは冒頭に置かれた原理論性のもっとも強い「歴史の知とアインディエイについて」を見てみましょう。近代歴史学の方法という大問題を驚くべきシャープさで整理してみせる論考で、歴史学に関心のある人には必読の基礎文献ということができるといっていいでしょう。

第二は「意味の解釈」。理論的先駆者はデカルトの敵ウイーゴで、現代の代表者は同じアナル派のブロック。理性という認識主体と歴史という認識対象を截然と分けることとはできないと考え、主体が歴史のなかに入りこんで、その時代の自然や時空間の感覚をつかみ、過去の事象の意味を解釈することに努めます。

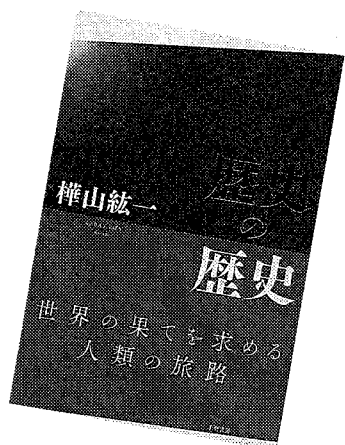
法が簡明に整理されただけでなく、人類の知の歴史のなかで、どういう理論的基礎に拠ってその方法が築かれたかが一目瞭然です。著者の慧眼に脱帽するほかなりません。そのうえで、榊山氏自身が歴史家としてこの三つの立場のいずれに入るかといえば、これはもう明らかに、ウィーゴ・ブロックの系譜でしょう。とくに、第2講「宇宙認識の拡張について」と第3講「ヨーロッパの自然観・身体観について」では、人体から宇宙空間まで、ミクロとマクロの差を超えて、万物にコスモスを見る人間の心性が強調されています。こうした思考方法は、キリスト教的枠格を離れば、日本の歴史学にも適用できる可能性があるのではないかと、なんと無責任な門外漢は楽しい空想の翼を広げたのでした。

ここで論じられる題材をきつと眺めてみると、歴史学の方法、宇宙構造の認識、ヨーロッパの自然観などの大きな問題が取りあげられるかと思うと、歴史、奴隷、割礼と宦官、医師と病い、倉庫の歴史

しかし、榊山氏はこの抽象的なアポリアに拘泥することはないとして、むしろ近代歴史学の具体的な三つの立場を析出してみせます。第一は「事象の説明」。始祖はデカルトで、近代歴史学ではアナル派のフェーヴルが代表者です。根本は歴史に向きあう明晰な理性にあって、この主体による問題設定から、客体としての歴史的事象の必然が説明されるという考え方です。

第三は「構造の解説」。理論的大立者はヘーゲルで、現代の歴史学ではフローテルやウオーラステインが代表格です。認識する主体もその対象たる客体的事象も、それより上位にある構造に含まれるので、そこで編成されているので、問題はその共時的構造を説明することだといふものです。

「思わず「なるほど」と膝を打ちたくなるくらい見事な説明です。現代歴史学の方法が、



「思わず「なるほど」と膝を打ちたくなるくらい見事な説明です。現代歴史学の方法が、

（学習院大学フランス語圏文学科教授）